

司式：三田村雅子  
奏楽：堀口 恵美

前奏：「バビロンの川のほとりにて」(J.S. バッハ)

招詞：わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある。(詩 124. 8)

讚美歌：204「よるこひの日よ」

交読詩編 105. 1-11

- 01 主に感謝をささげて御名を呼べ。諸国の民に御業を示せ。
- 02 主に向かって歌い、ほめ歌をうたい/驚くべき御業をことごとく歌え。
- 03 聖なる御名を誇りとせよ。主を求め人よ、心に喜びを抱き
- 04 主を、主の御力を尋ね求め/常に御顔を求めよ。
- 05 主の成し遂げられた驚くべき御業と奇跡を/主の口から出る裁きを心に留めよ。
- 06 主の僕アブラハムの子孫よ/ヤコブの子ら、主に選ばれた人々よ。
- 07 主はわたしたちの神/主の裁きは全地に及ぶ。
- 08 主はとこしえに契約を御心に留められる/千代に及ぼすように命じられた御言葉を
- 09 アブラハムと結ばれた契約/イサクに対する誓いを。
- 10 主はそれをヤコブに対する掟とし/イスラエルへのとこしえの契約として立て
- 11 宣言された/「わたしはあなたにカナン之地を/嗣業として継がせよう」と。

朗読聖書①ミカ書 6. 6-8

- 06 何をもって、わたしは主の御前に出で/いと高き神にぬかずべきか、焼き尽くす献げ物として/当歳の子牛をもって御前に出べきか。
- 07 主は喜ばれるだろうか/幾千の雄羊、幾万の油の流れを。わが咎を償うために長子を/自分の罪のために胎の実をささげべきか。
- 08 人よ、何が善であり/主が何を前にお求めておられるかは/お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し/へりくだって神と共に歩むこと、これである。

朗読聖書②ルカによる福音書 11. 37-54

◆ファリサイ派の人々と律法の専門家とを非難する

- 37 イエスはこうに話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。
- 38 ところがその人は、イエスが食事の前にはまず身を清められなかったのを見て、不審に思った。
- 39 主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにしているが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。
- 40 愚かな者たち、外側を造られた神は、内側もお造りになったではないか。
- 41 ただ、器の中にある物を人に施せ。そうすれば、あなたたちにはすべてのものが清くなる。
- 42 それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もおろそかにしてはならないが。
- 43 あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。会堂では上席に着くこと、広場では挨拶されることを好むからだ。
- 44 あなたたちは不幸だ。人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気づかない。」
- 45 そこで、律法の専門家の一人が、「先生、そんなことをおっしゃれば、わたしたちをも侮辱することになります」と言った。
- 46 イエスは言われた。「あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ。
- 47 あなたたちは不幸だ。自分の先祖が築いた預言者たちの墓を建てているからだ。
- 48 こうして、あなたたちは先祖の仕業の証人となり、それに賛成している。先祖は殺し、あな

たたちは墓を建てているからである。

- 49 だから、神の知恵もこう言っている。『わたしは預言者や使徒たちを遣わすが、人々はその中のある者を殺し、ある者を迫害する。』
- 50 こうして、天地創造の時から流されたすべての預言者の血について、今の時代の者たちが責任を問われることになる。
- 51 それは、アベルの血から、祭壇と聖所の間で殺されたゼカルヤの血にまで及ぶ。そうだ。言うておくが、今の時代の者たちはその責任を問われる。
- 52 あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ。」
- 53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、
- 54 何か言葉じりをとらえようとねらっていた。

## 祈祷

主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を崇め賛美致します。今日、11月9日、降誕前第七主日の朝、ここにこうして集められ、そして配信でも参加できて、そしてここで礼拝を献げられますことを感謝致します。

私どもは、今、厳しい戦争の中を生きています。主の願いにもかかわらず、私どもはパレスチナの悲惨な状況が未だなお終わりを迎えていないことを知っています。また、ウクライナの戦争の日々がさらに拡大して行くことを知っています。世界があらゆる技術的な進歩によってすべてのものが一体化して行くこの世界の状況の中で、どうしていつまでも戦いが続けられ、いつまでも戦いが止まないのでしょうか。私たちは、その扼殺される人々のことを思いながら、どうしてもそれを止められない思いの中に、苛立ちと無力感に苛まれています。そうした状況の中で、先ほど詩編をお読みしましたが、詩編85篇の中でも神さまはこう仰っています。「わたしは神が宣言されるのを聞きます。主は平和を宣言されます。御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に、彼らが愚かなふるまいに戻らないように。(9節)」と仰っています。「愚かなふるまいに立ち戻らないように」、主は私どもを止めてくださっているわけです。自らの愚かさ気づくことができる、そういう日々を待ち望みながら、私どもは祈り求めております。私どもは主の教えを学びながら、充分にそれを果たし得なかった罪の意識を持ちながら、ここに立っております。その罪の意識にもう一度立ち戻り、主の教えに戻り祈ることができますように、私どもをお導きください。

今日お話をくださいます大谷先生は、長いご病気で苦しんでいらっしやいました。こうやって復活されて、お話をしてくださることを大変篤い感謝の思いで伺いたいというふうにお思っております。大谷先生のお祈りは、いつも力強く、簡潔で、私どもの胸に届く、そのようなお祈りでありました。どうぞ、大谷先生のお話が今日も私どもを勇気付けてくださいますようにお祈り致します。

この信濃町教会の病に苦しんでいらっしやる方々、老いで教会までいらっしやるのが不可能なそういう方々のためにお祈り致します。どうぞ主のお慰めがそれらの方々の上に篤くありますように。

私どもがこの教会で今ここに集うことができた喜びを、日本全国の教会と、そして世界のすべての教会とともに、この主の時間を大切にして行くことが出来ますように、主イエス・キリストの聖名をとおしてお祈り申し上げます。アーメン。

## 説教 「イエスの非難」

太田昌恵

今年は例年よりも早くインフルエンザの流行が始まっているといえます。私も病気のために免疫力が落ちていますので、病院での診察の度に、「感染に気を付けて」と医師に言われていますが、最も有効な手段としては、マスクの着用、そして嗽と手洗いです。私たちが食事の前に「手を洗う」のは、このような感染予防も含め、もっぱら、衛生面への配慮からですが、イエスの時代には衛生に対する考えというのはあまりなかったと言えるでしょう。しかし「手を洗う」という行為自体は存在していました。この日、イエスは「ファリサイ派の人」に招かれて、その人の家で食事の席を共にしました。しかし招待した「ファリサイ派の人」が驚いたことに、イエスは食事の席に着く前に「身を清める」ことをなさいませんでした。「身を清める」とは具体的には「手を洗う」ことです。「手を洗う」こと、即ち、食事の前に「身を清める」ことは律法に定められたことではありません。「ファリサイ派の人々」にとって単なる習慣でした。「手を洗う」と言っても、ゴシゴシ洗うわけではなく、単に水に浸すだけのこと。では、なぜそのようなことをするかとえば、日常生活の上で異邦人との接触があり得るので、その汚れを落とすために、水に手を浸したのです。しかし、そのことをしなかったイエスを見て、食事に招いた「ファリサイ派の人」は「不審に思」います。私たちは後々のイエスに対する「ファリサイ派の人々」の行動をみて、イエスさまと「ファリサイ派の人々」とは、「さぞや仲が悪かったのだろう」と思いがちですが、当初はそのようなことはありませんでした。同じ会堂で礼拝を守っていましたし、この時のように「ファリサイ派の人」が招いて、徴税人たちとも一緒に食事をしています。このときもこの「ファリサイ派の人」は、悪意を持ってイエスを食事に招いたわけではなかったようですし、手を水に浸なかったこと、つまり「身を清め」なかったことを口に出して咎めたわけではありませんでした。しかし、イエスは、その「ファリサイ派の人」の心の内を見抜いて、「あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにしますが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている」と語ります。杯も皿も、外側は他人の目につきまます。そのような部分だけを綺麗にしているけれど「内側はどうなのだ？」とイエスは「ファリサイ派」に問いかけます。外面的な美しさ清さだけを追求し、内側内面的なものには、まるで目を向けようもしない彼らの態度をイエスは、愚かなことであり、そのような「ファリサイ派」を「愚かな者たち」として批判しました。杯や器を造られた神は、外側を綺麗にすることだけでなく、内側もお造りになったのです。しかし、「ファリサイ派」は、神が造られた外側は綺麗にするのに、同じ神が造られた「内側は強欲と悪意」で満たしています。器も杯も、元々は神によって造り出されたものです。勿論内側に入れられる食べ物や飲み物も、本来、神によって造り出されたもの。それを唯、自分たちだけで食することは、まさに「強欲と悪意に満ちている」としか言いようがありません。

そこでイエスは改めて清さとは何かを語ります。「清くなる」こととは、決して「身を清める」というような形だけのことではないのです。神が造られた「器の中にある物を人に施す」ことによって、「清くなる」ことができるのだと言います。単に外側だけを清くすること、つまり、見かけだけの清さは本物ではありません。その人の全身を清くするためには、外側だけでなく、「強欲と悪意に満」たされた内側を、そこに満たされた物を人に施すことによって、内側も外側も清くされることができるといえます。他人に対して恵みを分かち合うことができたとき、その思いに満たされたとき、その人は初めて内側

も外側も、すべてを清くすることができるのです。

ここからイエスは「ファリサイ派」に対して、「ファリサイ派の人々は不幸だ。」という言葉で3回繰り返します。「不幸だ」というと、その人、個人だけに向けられたもののように感じますが、この言葉《原語「**αἰμαίνω**」》は「**禍**だ」とも訳すことができます。「禍だ」と言われると、単に個人の問題ではなく、その人が属するものや事柄すべてに対して降りかかってくる“悪”だと考えられます。

イエスが最初に語る「ファリサイ派」の「不幸」は、「あらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしている」というものです。「薄荷」も、「芸香」も、香料や薬、香辛料として用いられるもので、野菜としては、それほどの価値のあるものではありませんでした。そしてまた、野菜自体、他のものに比べると安価なものだったと思われます。イエスが言うように、「十分の一の献げ物もおろそかにしてはならない」のですが、「ファリサイ派」は、そのように、野菜の中でも取るに足らないようなものまで「十分の一を献げる」きめ細やかさを持っていながら、「正義の実行と神への愛はおろそかにしている」のです。ここで、イエスがあげて「薄荷」と「芸香」とを取り上げていることには「ファリサイ派」がそのように香りのよいものに気を配る、つまり外側だけを飾るということの最初の批判をここで皮肉として用いるとも言えるでしょう。「十分の一の献げ物」は、神に対する畏れと感謝を表現し、神殿の幕で働いているレビ人や祭司への報酬として納め、また、貧しい人々に施すためのものでありました。それはまた、神や隣人との正しい関係を具体的に示すものでもありました。だからこそ、イエスもこの「十分の一の献げ物もおろそかにしてはならない」と言うのですが、「ファリサイ派の人々」は、このように「十分の一の献げ物」をしておきながら、貧しい人々への施しを怠り、そのことで自らの責任を追及することもなかったのです。

彼らは律法を守っているように見せかけながら、実際には律法に基づく神の正しい審きをこの世で実現することなく、律法をとおして神が示された人間に対する愛も実践していなかったのです。「正義の実行」とは、人と人との間の正しい関係、すべてのことを言います。「ファリサイ派」は、まさに外側だけの見せかけの正義は実行していましたが、本当に神が示された人間同士の愛を示すこともなく、正しい関係どころか人間同士の関係を歪めたものとしてしまいました。このように神の愛や審きといった根本的なことを疎かにしている「ファリサイ派」は「不幸だ」「禍だ」とイエスは言います。

本日の旧約聖書は、ミカ書6章6節から8節までお読みいただきましたが、まさにここには、神が人間に求めておられることが述べられています。

「人よ、何が善であり、主が何をあなたに求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである。」

「ファリサイ派」は此処に語られている、神が求めておられることを蔑ろにし、神への侮辱さえも生じているのです。そして、このことをイエスは「禍だ」と言います。

さらにイエスは、「ファリサイ派の人々は不幸だ」という言葉を続けます。会堂はイスラエルの民の集会所であり、礼拝と教育の場です。「上席」とは会堂で「第一の席」と呼ばれる場所のことです。この席に座することは名誉なことであり、会堂にいるすべての人々から注目されることを意味していました。「ファリサイ派の人々」は、神に対する愛よりも、この「上席」に座ることを愛していたのです。また「広場」というのは一般の人々が多く集まる場所です。ここ

で人々から挨拶されるということは、多くの人の目につくことです。ここでも「ファリサイ派」は、外側から自分たちの行いが重視されていることを好んでいるのです。

44 節では「あなたたちは不幸だ。」とイエス言っています。「墓」は死者を記念するためのものですが、墓や骨に触れると七日間汚されるとされています。そのために、わざわざ、ここが墓であると分かるように石灰で目印を付ける場合もありました。しかしそのようなことをしていない場合には、気がつかずに墓の上を歩いてしまい汚されてしまうのです。このようにして“気づかないまま墓の上を歩いてしまい、自分たちも気が付かないで他人を汚してしまっている、そのような行いをしているファリサイ派は不幸なのだ”とイエスは語ります。

このイエスと「ファリサイ派」とのやり取りを聞いていた律法の専門家一人が、今度はイエスに対して論争を投げかけます。イエスは、この律法の専門家に対しても、「あなたたち律法の専門家も不幸だ」と3回繰り返します。最初に、「人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしない」と言います。ここで言う「重荷」とは、実際の荷物のことと言うよりも、「律法」を指していると言えるでしょう。「律法の専門家」たちは、自分たちでさえも守りきれないような律法や規則を作り上げ、それを実行するようにと人々に強要しているのです。他人には監視の目を光らせながら自分たちは専門知識を利用して規則の網の目を潜り抜けています。それが「律法の専門家」と言って憚らない人たちの実態であることをイエスが見抜いて非難します。主イエスは人に重荷を背負わせるどころか、その重荷を負う人にご自身全体を課し、共にその荷物を背負ってくださいます。決して律法を強要することもなく、人に手を添え、病人を癒し、子供を祝福なさいます。イエスにとって律法とは人を縛り付けるものではないのです。

次にイエスは、「自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てている」と言って「律法の専門家」を非難します。イエスの時代、アモスやハバククなど過去の預言者たちの記念碑を建てるのが流行していましたが、それは一見、過去の人々を尊敬崇拝していることのように見えますが、そうではありません。「律法の専門家」たちが、今、過去の預言者たちの墓を建てているということは、自分たちの先祖が預言者たちを死に追いやったことに同意していることになります。実際には預言者の死に賛成をするということは、そうしなければ過去の預言者たちの言葉が自分たちの不正や偽善を暴露してしまうことになるからです。もし、この時代の「律法の専門家」たちが神の言葉を正しく預言し、正しい行いをしてきたのであれば、彼らもまた殺されていたでしょう。それなのに、今、この時まで生き続けてきた「律法の専門家」たちは、神の言葉を正しく実践して来なかったことが暴露されることになるのです。

そして最後にイエスは「知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきた」という非難をします。ここで言う「知識」とは、律法に関する「知識」を示しています。「知識の鍵」とは、律法を紐解いて理解する権限を示しています。しかし、「律法の専門家」たちは、そのような権限を独占しながら、律法に示された神の御心を理解しようとはせず、また、他の人々に対しても理解をする機会を与えようとしなかったのです。それはいかに「律法の専門家」が「不幸であり、禍であるか」を示しています。

こうしてイエスは「ファリサイ派」の家を出て行かれます。残された「ファリサイ派の人」や「律法の専門家」たちは、自分たちの不正や偽善を見事にイエスに言い当てられ、自分たちがいかに不正や悪事を働いてきたかを指摘されたことに腹を立て、イエスに対して激しい敵意を抱くようになります。そし

て、イエスを捉える口実を見つけるために、事ある毎にイエスに質問を浴びせかけ、イエスを捕らえようと機会をうかがうこととなります。この「ファリサイ派」と「律法の専門家」とのやり取りが一つの転換点となり、主イエスが十字架への道を歩まれることとなるきっかけになったとも言えます。

このイエスの「ファリサイ派の人々」などへの非難を読んで私たちはどう考えたらいいでしょうか。自らの身を顧みて思い当たることはないでしょうか。私たちが器や杯の外側だけを綺麗にはしていないでしょうか。内側にある神によって満たされた物を他の人に分け与えることを蔑ろにしていないでしょうか。それは決して実際に物を分け与えるということだけではありません。私たちが神から与えられた愛を自分だけで独占してしまい、他の人と愛を分かち合うことを疎かにしていないでしょうか。他人から見て尊敬されることだけに気を遣い、自らを低くして人に仕えることを忘れてはいないでしょうか。自分が果たすべき役割を見過ごしにして、他人にその役割を押し付けていないでしょうか。そして、そのような自分たちの姿を露わにすることを嫌い、過去を褒め称えることを隠れ蓑にして今の世に遣わされた救い主に背を向けていないでしょうか。

主イエスが非難されたことは、今の時代の私たちに向けられた言葉でもあるのです。知らず知らずのうちに他人を貶めていることは神をも貶めることになるのです。今一度、自らを省みて、その行いを正しい方向へと軌道修正しましょう。そして神の愛を周りの人々と共に分かち合い、神に愛される者としての歩みを進めて行きましょう。共に祈りを合わせましょう。

神さま、私たちは他人から見るところばかりに気を使って、自分の内側にある大切なものを蔑ろにしてしまうことがあります。本当に大切なのは、神さまから与えられた愛であり、恵みであり、それを他の人々と分かち合うことです。どうか私たちが、そのような行いのできる者となりますようお導きをお願い致します。

この祈り、私たちの主、イエス・キリストの聖名をとおして御前にお献げを致します。アーメン。

#### 讃美歌:463「わが行くみち」

#### 献金・感謝(飯山久子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

愛に富み給う天の父なる御神さま、聖名を賛美致します。11月第2聖日を、雨の中、兄弟姉妹と共に礼拝の恩みに与ることができ、また、ライブ配信によって恵みに与っている方もいらっしゃると思います。その恵みに感謝致します。今日は大谷先生をとおして御言葉の説き明かしをいただきました。“謙って神と共に歩む”という御言葉をいただき、私たちはもう1回、自分の内側を見つめ直し、その場、その時に応じて、絶えず謙虚であり、寛容でありたいと思われました。この今日から始まります一週間が、いつも神さまを信じ、イエスさまと共に居てくださることを感謝し、信仰の歩みを力強く、生き生きと喜びを持って歩み出すことができますように導いてください。見守ってください。お導きください。

私たちは、たくさんの恵みをいただいております。その感謝のしるしとして、只今、御前にお献げ致しました。どうぞ、お働きのためにお用いください。

神さまが教えてくださいました「主の祈り」を共に合わせ、新しい一週間は始めます。…アーメン。

派遣：讃美歌 88「心に愛を」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちと共に、いつまでもありますように。アーメン。

報告：次週「特別伝道礼拝」とその後の「拡大求道者会」への案内

後奏：「われ汝により頼む、主よ」(J. S. バッハ)